HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	Gisella Perl, I was a Doctor in Auschwitz, New York, International University Press, 1948, 189 p.
著者	木村, 和範; KIMURA, Kazunori
引用	開発論集(109): 237-254
発行日	2022-03-18

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

開発論集　第109号　237-254（2022年３月）

Gisella Perl, *I was a Doctor in Auschwitz*, New York, International University Press, 1948, 189 p.

木　村　和　範*

はじめに
１．ギゼラ・パールの略歴
２．回想録の概要
３．ギゼラ・パールとオルガ・レンゲル
４．イルマ・グレーゼの「獣性」
むすび

はじめに

標題に掲げた回想録の執筆者ギゼラ・パール（1907年-1988年）はハンガリーのユダヤ人で，第２次世界大戦末期にアウシュヴィッツに移送され，ハンブルク-ヴァンツベク収容所に再移送された後，ベルゲン-ベルゼンで解放された婦人科医である。原著書の初版は1948年に刊行されたが，2016年に，その全文のPDFファイルがThe Internet ArchiveにOpensourceとして公開された[1]。パールは，将来を嘱望された才能あふれる女性が次々と死んでゆく（殺されてゆく）収容所の中にあって，そのことによってもたらされる「文化的損失」（アンドレア・ルードルフ）[2]を憂いつつ，出産すれば母子もろとも殺害される状況のもとで母体の命を守るために，妊娠中絶という「選択肢のない選択」（ローレンス・ランガー）[3]を迫られた。

1980年代以降，収容所における女性囚人に注目した，ジェンダー視点のホロコースト研究が広がりと深まりを見せたが，その中にあってビルケナウなどの収容所において女性囚人と生活を共にしてその生と死を身近に見たパールによる回想録が注目され，初版刊行後70年以上を経た2019年に，フィリス・ラスナーとダニー・M.コーエンによる「序文」ならびにエヴァ・ホフマンの「あとがき」を掲載した新英語版[4]が公刊された。2020年には，クラウディア・ルシュコフスキーによってドイツ語に翻訳され，アンドレア・

(1) https://archive.org/details/IWasADoctorInAuschwitz/mode/2up, accessed on October 8, 2021.

(2) Andrea Rudorff, „Einführung in die deutsche Ausgabe,“ in: Gisella Perl, *Ich war eine Ärztin in Auschwitz,* Wiesbaden, Verlaghaus Römerweg GmbH, 2020 [Rudorff (2020)], S. 7.

(3) Lawrence Langer, *Versions of Survival* (Binghamton, NY: SUNY Press, 1982).

(4) Gisella Perl, *I was a Doctor in Auschwitz*, with “Introduction” by Phillis Lassner and Danny M. Cohen and “Afterword” by Eva Hoffman, Lahhem, Boulder, New York, London Lexton Books/The Rowan & Litttlefield Publishing Group, Inc., 2019. ただし，“Introduction”はLassner & Cohen (2019) と略記。

*（きむら　かずのり）北海学園大学開発研究所特別研究員（本学名誉教授）

ルードルフによる①「ドイツ語版への序文」と②50ケ所にわたる本文への脚注を収録したドイツ語版[5]が公刊された。

本稿ではこれらの2つの版を参照しつつパールの回想録を読み進めるときの周辺情報をいくつか取上げる。

1．ギゼラ・パールの略歴

原著者ギゼラ・パールは，現在のルーマニアのシゲトゥ・マルマツィエイ（ハンガリー名はマラマロスシーゲット，たんにシーゲットとも）に生まれた（図1参照）。幼くして父親の反対を押し切って医師を志し，ベルリンで医学を学んだ。シーゲットは，パールの出生時にはハンガリー王国領であったが，第1次世界大戦後はルーマニア領となり，さらに1940年のウィーン裁定によってハンガリー領に戻った。なお，同地は第2次世界大戦後のパリ条約（1947年2月）により，ルーマニア領になって現在に至っている。

ドイツは対ソ戦略から，1944年3月19日にハンガリーを占領した。夫クラウスとともに診療所を開いたシーゲットにも第三帝国の国是となったヴァーンゼー議定「ユダヤ人問題の最終解決」（1942年1月）の波が，ハンガリー作戦となって押し寄せた。ハンガリーのユダヤ人大量移送はブダペストのアドルフ・アイヒマンが陣頭指揮をとった。移送先となるビルケナウでは「アウシュヴィッツ収容所」[6]の総司令官ルドルフ・ヘスが，アイヒマンと密接に連携して受入準備に当たり，到着直後の選別場となったランプ（降車場）の拡幅，ガス殺のための死体焼却場の建設，収容所管理のための体制強化と死体焼却に当たる囚人（いわゆるゾンダーコマンド）の増員配置などが急ピッチで進められた。1944年7月にハンガリー臨時元首ミクローシュ・ホルティがユダヤ人の移送停止命令を発出するまでに，43万8000人のユダヤ人がアウシュヴィッツ第2収容所（ビルケナウ収容所）に移送された[7]。

ドイツによる占領後，パールは，夫，息子，両親，弟，義理の妹とともにシーゲットの「ゲットーのような収容所」に収容された後，1944年5月末にアウシュヴィッツに移送され，ビルケナウ収容所のBⅡc収容区（パールは「C収容区」と言っている。）に収容された（図2参照）。戦時中，娘ガブリエラは非ユダヤ人家庭に匿われていて[8]，戦後再会を果たしたが，息子と両親はビルケナウ到着直後の選別でガス殺され，夫，弟，義理の妹は解放を待たずに収容所で死亡した。

パールは，1945年1月までビルケナウ収容所の囚人医師であった。この時期は，ビル

---

(5) Gisella Perl, *Ich war eine Ärztin in Auschwitz,* übergesetzt von Klaudia Ruschkowski und herausgegeben von Andrea Rudorff, mit Rudorffs „Einführung in die deutsche Ausgabe,“ Wiesbaden, Verlaghaus Römerweg GmbH, 2020. ただし，以下では，この回想録は「ドイツ語版」と略記する。

(6)「アウシュヴィッツ収容所」は，オシフィエンチム地区のアウシュヴィッツ基幹収容所（アウシュヴィッツ第1収容所），ブジェジンカ地区のビルケナウ収容所（アウシュヴィッツ第2収容所），モノヴィッツェ地区のモノヴィッツ収容所（アウシュヴィッツ第3収容所），およびその付属収容所からなる複合体である。

(7) Rudorff (2020), S. 12. なお，木村和範「囚人医師ミクローシュ・ニスリの回想録について」『学園論集』（北海学園大学）第187号，2022年3月も参照。

(8) Rudorff (2020), S. 12.

Gisella Perl, *I was a Doctor in Auschwitz*, New York, International University Press, 1948, 189 p.

図１　占領下のハンガリーにおける主要ゲットー（1944 年）

［注記］現ルーマニア領は（ル），現スロバキア領は（ス），現ウクライナ領は（ウ）と記した。それ以外は現在もハンガリー領である。

（出所）「第二次世界大戦：時系列」『ホロコースト百科事典』（アメリカ・ホロコースト記念博物館［United States Holocaust Memorial Museum］）in: https://encyclopedia.ushmm.org/content/ja/article/world-war-ii-key-dates, accessed on November 22, 2021. ただし，以下の英語版にはこの地図は掲載されていない。https://encyclopedia.ushmm.org/content/en/article/world-war-ii-key-dates, accessed on November 22, 2021.

ケナウ収容所が「第三帝国の領内で拡大し続けた付属収容所に投入する女性囚人労働者のための最大規模の集散地へと発展した時期」[9] であった。労働適格者とそうでない者の収容前選別（到着直後の選別）は，ビルケナウの「死の門」をくぐったところにある「（ユダヤ人）ランプ」と呼ばれる降車場で行われた（図２）。労働適格とされた収容者は，その後も，毎日２回の点呼時に選別されたが，病舎もまた選別機能を果たした。「治癒の見込みがなく，場所と資源を無駄にすることが許されない人々を選別して殺害すること」[10] を目的とする病舎は，ヨーゼフ・メンゲレなどの親衛隊医官の恒常的な管理下にあった[11]。パールは，他の医療スタッフと同様にその倫理性や人間性が試され，しばしば医療倫理と「ヒポクラテスの誓い」[12] に違

[9] Rudorff (2020), S. 13.

[10] Rudorff (2020), S. 14.

[11] ルードルフは「1942 年以降は，囚人労働力が重要性を増して，強制収容所における死亡率を下げなければならなかったために，医療教育を受けた囚人を病舎に増員配置した。」と指摘している（Rudorff (2020), S. 15.）。

[12]「ヒポクラテスの誓い」は以下の通り。

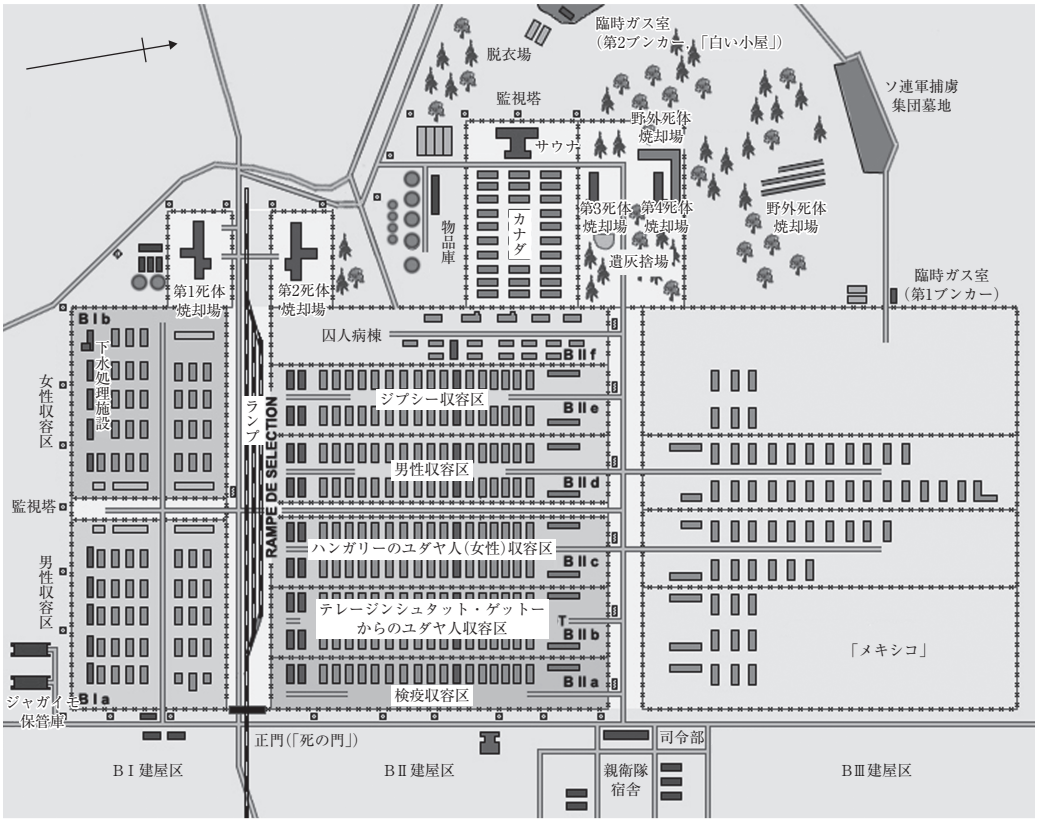

図２　アウシュヴィッツ第２収容所（ビルケナウ収容所）（1944 年）

（注）

１．ビルケナウ収容所の囚人収容区は，BⅠ建屋区（第１建屋区），BⅡ建屋区（第２建屋区），BⅢ建屋区（第３建屋区）に別れている。BⅢ建屋区（「メキシコ」）は未完成に終わった。

２．第２建屋区の「カナダ」と言われる区域には，移送されたユダヤ人などが携行した物品の保管庫（物品庫）があった。この収容区はBⅡg 収容区と言われる。

３．アウシュヴィッツ基幹収容所（オシフィエンチム地区）の死体焼却場を第１とする番号系では，ビルケナウ収容所における死体焼却場の番号は１番ずつ繰り下がる。図２の第３死体焼却場は 1944 年 10 月７日のゾンダーコマンドによる蜂起で破壊され，その他の死体焼却場は 1945 年１月のアウシュヴィッツ撤退までに，すべて破壊された。

４．1944 年夏ごろのビルケナウ収容所を示す。

（出所）“Des 45000 témoignent sur le sort des Tsiganes,” *Déportés politiques à Auschwitz*, http: //www. conmoto. jp/wordpress/auschwitz-birkenau/wp-content/uploads/sites/17/2018/08/NAZIPLANBIRK0001. jpg, accessed on November 25, 2021.

「医の神アポロン，アスクレーピオス，ヒギエイア，パナケイア，及び全ての神々よ。私自身の能力と判断に従って，この誓約を守ることを誓う。

この医術を教えてくれた師を実の親のように敬い，自らの財産を分け与えて，必要ある時には助ける。

師の子孫を自身の兄弟のように見て，彼らが学ばんとすれば報酬なしにこの術を教える。

著作や講義その他あらゆる方法で，医術の知識を師や自らの息子，また，医の規則に則って誓約で結ばれている弟子達に分かち与え，それ以外の誰にも与えない。

背したことが，回想録で述べられている[13]。

アウシュヴィッツ収容所がソ連軍によって解放されたのは1945年1月27日であるが，その直前（回想録の叙述によれば，おそらく1月10日過ぎ）にパールは，ハンブルク-ヴァンツベク収容所（ノイエンガンメ収容所の付属収容所）に囚人医師として移送された。同地には，1944年6月，ドレーガー社がガスマスク生産のための工場（女性囚人500人規模）を建設していた。このドレーガー工場へ移送されたパールは2ヶ月後に（1945年3月初旬），さらにベルゲン-ベルゼン収容所に移送され，「1945年4月15日のイギリス軍による収容所の解放直前の黙示録を思わせるような恐るべき事態に直面した。」[14] 解放後も同地に留まり医療活動に当たっていたパールは閑暇を得て，夫と息子を探す旅に出たが，すでに死亡していることを知り，ベルゲン-ベルゼンに戻って自殺を図るも，バチカンから派遣されたブラン神父に発見されて，一命をとりとめた。その後，ブラン神父の配慮により，パリの女性修道院で体力の回復を待つことになった。回想録はそこで終わっているが，ルードルフによれば，パールが回想録を書いたのは，パリに滞在中の1946年前半とされる（回想録の「まえがき」（後述）には1946年7月とある。）。

以下，ルードルフにならって簡単にその後のパールについて述べる[15]。1947年3月，生存ユダヤ人の支援組織「ユダヤ人アピール連合」[16] から助成を受けて，パールはアメリカ各地でアウシュヴィッツの体験を医療関係者に講演した。その間，アメリカにおける医師資格と永住権の取得を申請したが，トルーマン大統領が職権によって永住権を許可したのは1948年3月であった。永住権の申請審査に当たっては「アメリカ合衆国移民帰化局」の係官がナチスのシンパであったか協力

自身の能力と判断に従って，患者に利すると思う治療法を選択し，害と知る治療法を決して選択しない。

依頼されても人を殺す薬を与えない。

同様に婦人を流産させる道具を与えない。

生涯を［通して］純粋と神聖を貫き，医術を行う。

どんな家を訪れる時もそこの自由人と奴隷の相違を問わず，不正を犯すことなく，医術を行う。

医に関するか否かに関わらず，他人の生活についての秘密を遵守する。

この誓いを守り続ける限り，私は人生と医術とを享受し，全ての人から尊敬されるであろう！

しかし，万が一，この誓いを破る時，私はその反対の運命を賜るだろう。」引用は以下による。https://materializer.co/consulting/613/, accessed on November 14, 2021.

(13)「ビルケナウの女性囚人医師の中で妊娠中絶手術をしたのはギゼラ・パールだけではなかった。収容所の様々な部署で生命を救うために，最初は密かに女性の医師たちが中絶処置をした。多くの妊婦はみずから中絶を依頼したが，仲間の囚人に妊娠中絶を強く勧められて恐慌を来したケースもあった。後に，囚人看護婦のルイツァ・サラモンは次のように書いている。『妊娠を中絶させることによって，私たち［医療スタッフ］が何とかしてより多く配給されるはずの食料やその他の恩恵を彼女たち［妊婦］から奪い去ろうとしていると悪意にとる人がいた。その都度，私たちはそうするしか生命を救えないと説明しなければならなかった。［真意が］理解されるまでには時間がかかった。』」（Rudorff (2020), S. 21. ただし，［ ］内は引用者による。）

(14) Rudorff (2020), S. 32.

(15) Rudorff (2020), SS. 33ff.

(16) United Jewish Appeal, see the HP of AJHS (American Jewish Historical Society) : https://ajhs.org/uja, accessed on November 16, 2021.

者であったかを繰り返し尋問し，それにたいしてパールは，ビルケナウでヨーゼフ・メンゲレのアシスタントであったと言われるのは不本意であって，母親の生命を守るためには妊娠中絶をしなければならなかったと応じた[17]。永住権取得後，パールはシナイ山病院（ニューヨーク）の産科に勤務し，1951年にはマンハッタン・パークアベニューで診療所を開設した。年金受給年齢に達してイスラエルに移住し，娘と暮らし，エルサレムのシャーレ・ゼテック医療センターで家族計画と不妊治療の専門医としてボランティア活動をした。1988年，同地で死亡した（81歳）。

2．回想録の概要

回想録には，パールの夫と息子への献辞とマイケル・コッホへの謝辞の後に，「はしがき」が掲載されている。アメリカの読者を想定した「はしがき」の全文は以下の通りである。

> 100年前に，ドイツの偉大な詩人ハインリッヒ・ハイネは，ドイツ人の魂に内在している破壊精神が必ず「復活」すると予言しました。
>
> そして，次のように述べました。「キリスト教は，ある程度までドイツ人の残忍な闘争心を和らげた。しかし，闘争心そのものは破壊されてはいない。十字架はこの闘争心を押さえこむ護符のようなものであるが，これが壊されれば，北欧の詩人たちが今なお詠じている いにしえ の戦士たちの獰猛さが［ドイツ人の心の中で］息を吹き返し，殺気だった高ぶりの心が再びドイツ人を支配することだろう。不幸にして確実にそのようになるのだが，そのときには古代に生きた戦争の神々は神秘の墓から抜け出て，瞼（まぶた）の上に何世紀もの間，積もりに積もった埃（ほこり）を拭い去り，巨大なハンマーでゴシック様式の大聖堂を粉砕するであろう。」[18]
>
> そのとおりになりました。ハイネは正しかったのです。古代のサディスティックなドイツ人が，墓から出てきました。そして，親衛隊の制服を着て，キリストが架けられた十字架に模した地獄の鉤十字を掲げて，破壊し，焼き尽くし，略奪し，拷問し，人を殺すために行進しました。この堕落したファウストであるヒトラーとその手下たちは，ドイツ国民を征服と虐殺へとみずから進む道具に改造したのです。
>
> カント，ゲーテ，ベートーベン，バッハ，デューラー，その他多くの比類ない天才を輩出した人々が，堕落，犯罪，拷

[17] このことはパールの回想録を下敷きにした映画『遺灰の中から（*Out of the Ashes*）』（ジョセフ・サージェント監督（Joseph Sargent），2003年）にも見ることができる。なお，この映画は，YouTubeで公開されている（https://www.youtube.com/watch?v=KGXu_GvnE4U, accessed on October 14, 2012）。

[18] ルードルフはこの典拠を以下のように特定している（ドイツ語版脚注1：S. 37）。Heinrich Heine, *Zur Geschichte der Religion und Philosophie in Deutchland, Dritte Buch*, Heinrich Heine, *Werke und Briefe in zehn Bänden*, Band 5, Berlin und Weimar 1972, S. 305.

問の悦楽という泥沼にあまりにも深くはまり込んでしまいました。そのために，それを見ていたすべての人は同じ人間であることを恥と思うようになりました。どうしてそうなってしまったのでしょうか。私たちにはまったく理解できません。

無慈悲な残忍性を誇りとする「永劫のドイツ」が，本書の中でその素顔を見せます。自由の女神に守られて人生を歩んできたみなさん，この記念碑の前で立ち止まって，その碑文を読んでみてください。読んだ後は，それを魂に刻み，形見の品としてください。あなた方に死者は語りかけるでしょう。でも，死者はあなた方に復讐して欲しいと願っているのではありません。自分たちのことを覚えていて欲しい，ドイツの非人道性によってこれ以上罪のない犠牲者が増えないように見守って欲しいと言っているのです。（11 頁-12 頁）[19]

この「まえがき」には，次に掲げる 27 篇が回想録の本篇として続いている。それは，おおむね時間的経過の順に配列されている。タイトルとともに，その内容を簡単に紹介する。ただし，タイトル前の番号づけは引用者による。

1．カペツィウス博士

シーゲットにあったパールの診療所にイー・ゲー・ファルベン社の薬品セールスマンとして訪問したヴィクトル・カペツィウス（薬剤師）は，ナチスに批判的であったが，後にアウシュヴィッツで再会したときには，親衛隊の将校になっていた。カペツィウスは，ダハウ収容所薬局長を経て，アウシュヴィッツでは青酸ガス（チクロン B）の調達にあたる他，ハンガリー作戦ではランプでの選別を担当した。1965 年に戦争犯罪が問われて 9 年の懲役刑に処せられた。カペツィウスの変節ぶりとともに，ドイツ占領直後の様子が次のように述べられている。「1944 年 3 月 19 日，好天に恵まれた春の日曜日に，ドイツ軍はハンガリーを制圧し，私たちの運命が決まった。ドイツ軍は，短い時間で残忍な行動計画の一切を無理矢理実行に移すべく，矢継ぎ早に次から次へと命令を繰り出してきた。まず，黄色いダビデの星を着用しなければならなくなった。そして，その後には，外出禁止時刻の通達，旅行の禁止，家宅捜査，身柄の拘束，商店の営業や商取引の禁止，止むことのない警戒警報が続いた。ついには，3 日間の禁足令が出た。私たちは恐怖に怯えながらアパートに身を寄せ合って，次の一撃を待った。官製の強盗が来た。警察が家々に押し入り，金，銀，宝石，貴重品，金銭を要求した。その場に人がいたにもかかわらず，傍若無人にも，彼らは食器棚，引き出し，クローゼットを開けて，欲しいと思ったものは何でも持ち出していった。」（17 頁）その後，パールは家族とともにゲットーに収容された。

2．「一緒に行きたい」

訳あって家政婦として引き取ったエリ

[19] 以下，回想録からの引用頁は初版（1948 年版）による。

ザベトが，ゲットーで難儀しているパールに食料を運んでくれた。移送の日に駅で「一緒に行きたい」と叫んだ声が今でも耳に残っている。

3．アウシュヴィッツ到着

シーゲットから8日をかけてアウシュヴィッツに到着した直後の選別が，あっという間に終わり，パールがC収容区（BⅡc収容区，図2参照）に収容されるまでが描かれている。ランプで別れた家族とは2度と会うことはなかった。到着時の印象をパールは次のように言っている。「ドイツの絶滅収容所から生還した人は，アウシュヴィッツで私たちを迎えたあの光景を忘れることができない。天を覆う黒雲のように死体焼却場から立ち上る煙が，収容所に垂れ込めていた。舌のように先の尖(とが)った赤い炎が空をなめ，死体の焼けるいやな臭いが漂っていた。銃で武装し，鞭と棍棒を手にした親衛隊員が私たちに詰め寄り，夫と妻を分け，親と子を分け，老人と若者を分けた。抵抗する者や弱すぎて動きが緩慢な者は，殴られ蹴られ引きずられた。痛くて恐ろしく疲れたのに加えて，最愛の人を失ってしまったショックのあまり，茫然自失とした私たちは数分後には，別々のグループに分かれて立っていた。」（27頁）

4．アウシュヴィッツ　檻の中のある日の出来事

バラック1棟に1200人が収容された収容所の衛生環境（トイレ，水飲み場）の劣悪さが述べられている。「3万人から3万2000人の女性のためのトイレは1ヶ所しかなく，1日のうちの決まった時間だけ使用することが許可された。この狭い建物に入るために行列を作ったが，排泄物で動きがとれなかった。私たちはみんな赤痢にかかっていたので，自分の番まで待てずに，ボロ服を汚してしまったが，それを脱ぐこともできないので，ひどい臭いが身にまといついて離れず，私たちの存在そのものをおぞましいものとした。トイレには深い溝が掘ってあり，そこには一定の間隔で板が渡されていた。私たちは電線に止まる小鳥のように，板の上にしゃがんだが，くっつきすぎて，お互いに汚さないで済ますことはなかった。」（33頁）

5．アウシュヴィッツの夕食

「私がアウシュヴィッツで耐えなければならなかった飢餓を描写できる大作家はまだ誕生していない。」（38頁）と言うまでの想像を絶する飢餓の中で，「おが屑，ジャガイモの皮，何だか分からないもの」（39頁）が入ったスープのような液体（3リットル）が6人分として配給される「夕食」とそれをめぐる人間模様が描かれている。

6．「美容室」

毛髪は軍需物資としてドイツ本国に送られた。毛髪を刈り取られることが，アイデンティティをはぎ取る残忍な処置だったと述べられているとともに，粗末な衣服と履き物を支給する様子が描かれている。そのとき，「老若，美醜を問わず，痩せも太(ふとりじし)り肉も，多くの女性が無防備のまま裸で整列し，誇り高きドイツを体現する変態で堕落したのぞき見趣味の

下司どもの飢えた目の前に我が身を晒した。」(43 頁) と表現されるような屈辱を味わったのである。

7．アウシュヴィッツの宝の山　ユリカ・ファルカス

ビルケナウの第 2 死体焼却場の近くに「カナダ」と言われた物品庫(「宝の山」) があった (図 2 参照)。ここでは移送された人々の携行物資が保管されていた。物品整理のとき，名前を縫い付けた標題の女児 (5 歳，同郷) のコートを見つけたパールは次のように書いている。「8 日後，アウシュヴィッツの門で旅が終わった。ユリカは母親の手からもぎ取られ，服を脱がされ，何百人もの男の子や女の子と一緒に死体焼却溝に投げ込まれ，生きながらにして焼き殺されたのである。ユリカの母親は，我が子の運命を思い出すという拷問を受けないで済んだ。彼女はガス室に直行し，情け深い死のおかげですべてを忘れることができた。そして今，この小さな青色のコートは，青い目の別の子，おそらくはユリカの母親を殺したナチの殺人犯の娘に着せるためにドイツへ搬送されるのを待っている。」(51 頁)

8．シャルロッテ・ユンガー

標題の少女 (15 歳) はパールと同郷の医師の子で，バレエで将来が嘱望されていた。シーゲットで拘束されるとき，シャルロッテの父は妻子に毒液を注射して殺害しようとした。自分と妻は死んだが，子どもだけが生き残って，アウシュヴィッツに着いた。おそらく注射のせいで精神に障がいを来し，人目もはばからずに収容所で踊るようになった。「疲れて，顔面蒼白になり，口から泡を噴いて倒れるまで，難易度の高いステップを踏んで踊り続ける瀕死のシャルロッテを見に，ドクター・メンゲレは毎日やって来た。メンゲレは大好きな『お父さん』のふりをして，優しい言葉をかけてシャルロッテを褒めそやした。／ある日，ドクター・メンゲレはシャルロッテのバレエに飽きてしまった。幸福と成功を約束された非凡な才能をもったこの子は，赤十字のマークが付いた救急車に乗せられた。そして，弱者が弱者であるという罪のために罰を受ける死体焼却場に運ばれて行った。」(55 頁。／は改行を示す。以下同じ。)[20]

9．ひも一筋の価値

足が化膿して歩行できなくなると労働不能と見なされ殺害される。収容所では靴がいかに大切かは，収容者の回想録の中でよく指摘されている。28センチメートルの男ものの靴を手に入れたパールは，靴ひもを得ようとして，ある男性囚人にパンとの交換を頼んだ。男は身体を要求したために，パールはその場を逃れた。パールは収容所システムが人間を堕落させると断じ，そうはなるまいと決意を新たにした。

10．イルマ・グレーゼ

イルマ・グレーゼ (1923 年-1945 年) は，18 歳のときにラーヴェンスブリュック収容所の看守として採用され，

[20] この逸話は，脚注 17 に掲げた映画でも取りあげられている。

1942年にアウシュヴィッツ収容所に赴任し，その後アウシュヴィッツからベルゲン-ベルゼン収容所に異動となり，そこでイギリス軍に逮捕された[21]。ベルゲン-ベルゼン裁判で死刑判決を受け，1945年に絞首刑が執行された。

パールの回想録では，乳房を鞭で切り裂かれた女性囚人にたいする，麻酔なしの手術のさまを恍惚として見ているグレーゼの倒錯ぶりが描かれているとともに，グレーゼの依頼（命令）を受けて妊娠中絶手術をしたときの様子が述べられている。

11. アウシュヴィッツの「コンサート」

エルサレムの教会が破壊されたことを記念するティシャ・ブ＝アーブは，ユダヤ教の最大の祝日であり，1944年は7月29日の夕方から翌日の夕方までであった[22]。パールによれば，この日，アウシュヴィッツで「コンサート」が開かれた。「会場」には，ユダヤ人の遺灰が敷かれ，囚人はその上に座るように強制された。しかも，その日，ビルケナウにある4ヶ所の死体焼却場では，それぞれ1万人のユダヤ人が焼かれたと言う。パールは次のように言っている。「焼却棟から立ちのぼる火柱は止むことを知らず踊り狂い，太陽よりも輝き，太陽よりも熱かった。もうもうとした煙が鼻から入り込み，そのススは身動きせずに遺灰の上に座っていた大勢の人々の上に降り注ぎ厚い層をなした。感情を押し殺していた3万2000人の女性たちは打ちのめされた。その悲しみは，泣いても涙を流しても，けっして慰められることはなかっただろう。女性たちは顔には出さなかったが，絶望しきっていた。」（68頁）

12. マーガリン

皮膚病のための医薬品がない収容所で，パールの推奨したマーガリンが薬効を発揮したことが述べられている。

13. 7号棟　トイレ

ユダヤ人から血漿を採るための採血場となった7号棟および情報交換場，社交場，闇市場，短時間の性交の場として使用されたトイレが取りあげられている。

14. C収容区での出産

妊婦は申し出ろという指示に従った女性囚人が殺害される現場を目撃したパールは，密かに出産させることにした。しかし，生まれた子どもが生きていくための手立てがなく，やむなくパールは嬰児を殺害する。ここでは，新生児に食料が配給されず，生後8日で餓死した事例が述べられている。

15. 病院のスタッフ

オルガ・シュヴァルツという名で登場するオルガ・レンゲル（3. ギゼラ・パールとオルガ・レンゲル参照）をはじめとする，献身的にC収容区の病舎でともに働いた医療スタッフ一人ひとりの性格が肯定的に述べられている。

16. 運命のハンカチーフ

1944年の夏ごろ，パールはリリィと

---

[21] “Irma Grese (1923-1945),” Jewish Virtual Library, https: //www. jewishvirtuallibrary. org/irma-grese, accessed on November 18, 2021.

[22] “Tish’a B’Av 1944,” in: https: //www. hebcal. com/holidays/tisha-bav-1944, accessed on October 15, 2021.

再会した。リリィは連合軍の勝利を信じていた著名なオペラ歌手であり，その前年念願が叶ってパールはブダペストのパーティで初対面の挨拶を交わした。

身体を拭いたり，トイレの後に使用したりするために，収容所では下着を少しずつ裂いていた。リリィは下着検査でスリップの紐だけしか残っていないために手ひどく咎められたことがあった。そのリリィが点呼のときに選別された。「とうとう，リリィは親衛隊の看守の前に引きずり出された。最近になって伸びてきた髪の毛が刈られ，着ていたボロ服をはぎ取られ，囚人全員の前に立たされた。貴様らもこうなるぞということを教えるために，リリィはむち打たれ，四肢は引き裂かれ，血が吹き出して私たちにふりかかった。黒い手押し車に乗せられて死体焼却場に行く途中，リリィは野獣のような叫び声を出していた。」（103 頁）

17. ある女の死

イビは息子と生きて再会することだけを願って，収容所の生活に耐えてきた。選別のたびにトラックから飛び降りて難を逃れたが，ついにメンゲレが発見して，激しく殴り耳を引きちぎった。「背の高い痩せぎすだったイビの，骨だけになった両肩の上にあったのは，人間の頭ではなかった。見るもおぞましい，判別不能の血に染まった丸い物体が乗っていたのだ。ドクター・メンゲレはイビを列に押し戻した。異常なほどにやせ細ったイビは，長い足で歩調を取って行進した。目の前を歩く血だらけの頭は，戦争によって引き裂かれる運命を背負った地球のように見えた。その地球を運んで炎の中に投じようとしているのは，生け贄となったイビの肉体であるようにも思われた。」（111 頁）メンゲレのこのような獣性は 2 話後でも述べられている。

18. ダイヤモンドを入れた袋

オランダのユダヤ人が密かに持ち込んだダイヤモンドをしなびたジャガイモ 3 個と交換する様子が描かれている。

19. 命を救う胎芽

第 17 話の「ある女の死」と同様に，ここでもメンゲレの激しい暴力気質が描かれている。親衛隊の女に頼まれて妊娠しているかどうかを診察した謝礼にもらったバケツ一杯のジャガイモをみんなで食べようとしていたところに，メンゲレがやって来た。見咎めたメンゲレは，「野獣のようになって辺りを駆け回り，手当たり次第に粉々になるまで打ち壊し」金切り声をあげ，ストーブを蹴飛ばし，手術台を倒し，ジャガイモを踏みつぶした。それでもなお，怒りが収まらなかった。

その日，パールはメンゲレの命令で摘出した妊娠 8 週目の胎児をホルマリンの瓶に入れて保存していた。パールがそれを思い出して，メンゲレにその瓶を渡そうとした。「ドクター・メンゲレはわめき散らすのを止めて，私から瓶をもぎり取った。ちょっと前までは，手がつけられないほど暴れ回る狂気の人のように見えたメンゲレの顔は，満足げに残忍な笑顔を見せた。／『これはいい。美しい。明日，第 2 死体焼却場に届けろ。ベルリンに郵送する。』ドクター・メンゲレはそ

れまで何をしたのかすっかり忘れてしまったかのように，踵を返して病院を後にした。」（122 頁）

20. ジャネットの物語

アウシュヴィッツで初めて双子を生んだフランスのユダヤ人ジャネットが出産後は至れり尽くせりの待遇を受けた。出産後，新生児を 2 人とも毎日連れ出し，メンゲレが実験材料にした。その挙げ句，2 人の子どもは死亡した。「ジャネットはもはや用済みの身となった。ドクター・メンゲレが現れて，双子の死亡を知ったとき，烈火のごとく怒ったが，ジャネットを死体焼却場にやったときには笑っていた。」（127 頁）

21. C 収容区の清算

ハンガリーのユダヤ人女性 3 万 2000 人が収容されていた C 収容区は 1944 年 10 月に「清算」され，4 週間かけて 2 万人が殺害された。残りの 1 万 2000 人は労働力としてドイツ国内へ移送された。収容区にいて，「清算」の恐怖に震えた日々が描かれている。新規到着者のためのバラックを確保するために，このような大規模の「清算」がしばしば行われた。

22. さらば，アウシュヴィッツ

1945 年 1 月（おそらく 10 日すぎ）にパールはアウシュヴィッツ-ビルケナウからハンブルク-ヴァンツベク収容所に護送された。それまでビルケナウ収容所の病舎（19 号棟）で共に働いていた医療スタッフの思い出とメンゲレによる女性囚人への人体実験が述べられている。

23. ハンブルクへの旅

行き先を告げられず，いつ殺されるかと思いながら，2 人の親衛隊員に護送され，朝から歩きどおしで，その夜，カトヴィッツ（アウシュヴィッツの北西約 30キロメートル）に着いた。そこから汽車に乗りベルリンで乗り換えてハンブルクに着き，目的の工場に着いたのは，出発して 4 日目だった。

24. ハンブルク　ドレーガー工場

到着したのは，女性収容所（ドレーガー社の工場）の病舎だった。1945 年 2 月からは連合軍の空襲が始まって怪我人が続出し，パールは仲間の医療スタッフとともにその手当に追われた。1945 年 3 月 1 日，結核患者を入院させていたことが咎められて，「収容所生活の中で一番激しく殴打された」。（161 頁）

25. ベルゲン-ベルゼン

「ベルゲン-ベルゼンには，組織ぐるみで遂行するというドイツ人に備わった名高い才能が発揮される兆候は，何一つ見当たらなかった。アウシュヴィッツでは，慎重に計画を立てて絶滅が実行されたが，ここの大量死は，計画が立案されていなかった結果である。」（165 頁）

「ベルゲン-ベルゼンでは壁際に寝棚を備えたバラックは，数棟だけだった。それ以外のバラックでは，地べたに生存者，死者，死にかけている人が一緒に汚物にまみれて横たわっていた。一棟あたりの毎日の死亡者は 80 人から 100 人である。専用の死体焼却場はなかった。まだ体力の残っている人が死体を引きずり出して，『肥だめ』［と呼ばれた死体堆積

場］に捨てるまで，死者は死んだ場所に放置されていた。誰もがチフスに罹患し，シラミにたかられ，ネズミにかじられていた。食べ物，水，薬がなかった。バラックの間の狭い通りは，泥の中を這いずり回る骸骨のような男と女で溢れかえっていたが，これらの人たちは，一滴の水，わずかな食べ物を探し，ついには疲れ果て，山をなす死体のそばで死んでいった。生きたいという意欲がまだ残っていた人は，人肉を食べるようになった。死んだばかりの人の身体を開いて，肝臓，心臓，脳を食べたのである。」（167 頁，［ ］は引用者による。）

26. グリン・ヒューズ准将

1945 年 5 月 15 日にベルゲン–ベルゼン収容所はイギリス軍によって解放された。タイトルにある軍人はイギリス軍の軍医であり，ベルゲン–ベルゼンでの生存者の救出と看護に当たった。解放の日，ワルシャワ蜂起（1944 年 8 月 1 日～1944 年 10 月 2 日）に加わったマルサが出産し，居合わせた准将の尽力もあり，母子ともども一命を取り留めた。

27. ブラン神父

標題にある神父は，バチカンがベルゲン–ベルゼン収容所に派遣した従軍神父である。背が高かった神父は収容者から「小さな神父さま」と慕われ，収容者の体力回復と人間性の回復に尽力した様子が描かれている。自殺未遂をしたパールもまたブラン神父によって一命を取り留めることができた。

3．ギゼラ・パールと オルガ・レンゲル

新英語版の「序文」「あとがき」，およびドイツ語版の「序文」と本文への脚注は，ギゼラ・パールの回想録を読み進める上で，多くを示唆する。以下では，それらにもとづいていくつかの点を述べる。最初に，『アウシュヴィッツの五本の煙突』（金森誠也訳）というタイトルの回想録の著者として知られているオルガ・レンゲル[23] を取りあげる。

オルガ・レンゲル（1909 年–2001 年）は医療助手の資格をもち，クルジュ・ナポカ（たんにクルジュとも。現ルーマニア領，図 1 参照）で夫ミクローシュ・レンゲルが開業した医院で働いていた。夫が 1944 年 5 月にドイツ軍に拘束され，移送されることになったために，オルガは夫に同行することを申し出て，両親と 2 人の子どもとともに移送された。オルガだけがビルケナウに収容された。

[23] Olga Lengyel, *Five Chimneys: The Story of Auschwitz*, reprinted by Must Have Books (Victoria, BC) in 2021. Originally published by Ziff-Davis Publishing Co. in 1947.『アウシュヴィッツの五本の煙突』金森誠也訳（世界ノンフィクション全集 28）筑摩書房，1962 年（この訳書では全体のおよそ 6 割が訳出されている）。オルガ・レンゲルの回想録は，英語版に先行してフランス語版（*Souvenirs de l'au-delà*（死後の世界の回想），Editions du Bateau Ivre, 1946）が出版された。なお，英語版は，Maria Garcia によってオンライン・フリー PDF 版として 2012 年 2 月 10 日に BooksVooks で公開されている（*Five Chimneys: The Story of Auschwitz* by Olga Lengyel Pdf Read Online Free - Page 1 (booksvooks. com), in: https: //booksvooks. com/fullbook/five-chimneys-the-story-of-auschwitz-pdf. html? page=1, accessed on November 6, 2021）。

ほどなくオルガ・レンゲルは知己のギゼラ・パールと再会し，C 収容区（BⅡc 収容区）の病舎で共に医療スタッフとして働くことになった。

ところが，ギゼラ・パールの回想録に登場するのはオルガ・レンゲルではなく，オルガ・シュヴァルツである。この人がオルガ・レンゲルであると同定したのはアンドレア・ルードルフである[24]。ルードルフは次のように述べている[25]。

> 1946 年にパリで，その後シカゴでも出版されたオルガ・レンゲルの回想録は，まだドイツ語に翻訳されてはいないが，その回想録とギゼラ・パールとは特別の密接な関係がある。パールとレンゲルの 2 人は，BⅡc 収容区の病舎で一緒に働いていたからある。1946 年には，この 2 人はパリにいたので，回想録を編集していたときに互いに連絡を取り合っていた可能性は高い。BⅡc 収容区の病舎で，共に生活し一緒に働いた 2 人の関係が密であったことを考慮すると，2 人の回想録の内容に重なり合う部分があるのは，不思議なことではない。ギゼラ・パールはオルガ・レンゲルのことをオルガ・シュヴァルツと紹介していて，いくつかの事実に手を加えているが，それは文学的・創作的な理由からであろう。パールは，オルガ・レンゲルを熟練した医師であると言っている。しかし，実際のところオルガ・レンゲル自身は，その夫であるドクター・ミクローシュ・レンゲルの病院で多数の臨床経験を積んだ医療助手にすぎなかったことを重く見ているし，夫のドクター・レンゲルは，パールが言っているようにベルゲン-ベルゼンで生き残ったのではなくて，アウシュヴィッツ-モノヴィッツ収容所からの死の行進で死亡している。
>
> パールは，オルガ・シュヴァルツをはじめとして描写した人物の史実に即した伝記にはあまり意味をおかず，むしろ，収容所に存在していた人たちのアレゴリーとして捕らえて，友情，生存意欲，生存を賭けた闘い，犠牲，さらには母親の衰弱，うつ，幻想，苦悩などをテーマにしたのではないかと考えられる。

ギゼラ・パールとオルガ・レンゲルが互いにその人となりをどのように見ていたかは興味深くはあるが，ここでは，2 人の回想録における記述内容の食い違いが歴史修正主義者によって批判されてていることにたいする，ルードルフによる反批判を紹介する[26]。

> すでにオルガ・レンゲルとギゼラ・パールの回想録にはホロコースト否定論者によって疑義が提起されているが，これにはインターネットで簡単にアクセスできる[27]。歴史修正主義者の書いたも

---

[24] パールの回想録（ドイツ語版）にたいするルードルフの脚注（Anm. 22, S. 113）を参照。なお，オルガ・レンゲルの回想録では，ギゼラ・パールは「ドクター G」として登場する（Olga Lengyel, *Five Chimneys*, pp. 141ff. etc. 訳書 82 頁以下）。

[25] Rudorff (2020), S. 8f.

[26] Rudorff (2020), S. 28f. ただし，引用文中の［ ］内は引用者による（以下同じ）。

のとまじめに向き合っても，この人たちは議論による意見交換を目的としてはいないから，得ることは何もないが，執筆者［歴史修正主義者］がレンゲルとパールを嘘つき呼ばわりするときに，それを正当化するのに役立っているのはどのようなことであるかを見る価値はある。この執筆者は，２人の書いたことに小さな食い違いがあることをあげつらっている。それは，看守のイルマ・グレーゼの求めに応じてギゼラ・パールがグレーゼに施した妊娠中絶についてである。ギゼラ・パールはイルマ・グレーゼのところに一人で行ったと書いているが，オルガ・レンゲルは看護婦として随行したと説明している。２人は，異なった文面で，時間も違えば，場所も違えて表現している。このような記憶の乖離はすべて，自然な仕方で記憶が影響を受ける変形過程として科学が特徴づけていることの中に完全に収まるものである。自明なことであるが，記憶というものは，どのようなものであれ思い描かれた歴史的現実のコピーではなくて，多くの要因によって形作られ，社会的に構成された変化する総合的経験である。この間，この［変形］過程ならびに歴史研究における生存者の回想の取扱にかんする幅広い研究がなされてきた。出会いとか会話のような同時代の資料による検証が不可能な経験，すなわち収容所における個人的な体験を記述するときには，実際にそれを伝えるときに起こりうる不正確性といったことはまったく重要ではない。パールが中絶手術の場に一人でいて，それをレンゲルに話し，それが［レンゲルの］個人的経験として，記憶されたか，あるいはまた実際にレンゲルもその場にいたが，パールはそれを忘れたか，あるいは重視しなかったかの理由で，パールが［一緒にいたことを］書かなかったのか。このようなことは，実際に起こったことにとっては重要ではない。短時間ではあるが収容所の中で起こった主客転倒［パールとグレーゼの関係が逆転したこと］の描写，思いやりのひとかけらもなく残忍に権力を行使していたグレーゼが突如として，一囚人の手腕と好意に頼るようになったことへの満足感［の表出］，そして，あの女看守は本当はこの事態を許さないのではないかという状況がまさしく危険だとする認識，これらが伝えられるべき情報であって，このことこそが，重要なのである。

回想録に出てくる出来事や日常にかんする描写で私たちにとって重要なことは，囚人のものの見方，知識水準，とっさの決断，期待，不安など，他の資料では窺い知れない事柄が分かることである。収容所の現実を洞察した上で，囚人の共同生活，女看守や親衛隊員との付き合いを描写できるのは，囚人しかいないからである。

(27)「インターネットで簡単にアクセスできる」として，ルードルフが取りあげている歴史修正主義者のサイトは “Five Cheimey’s — Two Liars? [http: //www. cwpoter. com/fivech. htm]” であるが，2021 年 11 月 18 日現在，セキュリティの関係からアクセス不能である。

4．イルマ・グレーゼの「獣性」

イルマ・グレーゼはいまだに「美しき野獣（Beautiful Beast）」と言われている[28]。ルードルフによれば，このような「決まり文句」はベルゲン–ベルゼン裁判が報道された1945年にすでに使用されていた。この裁判の行方を注目していたと考えられるギゼラ・パールもオルガ・レンゲルも，ともに「ナチスの女性戦争犯罪人による暴力行為を衝動的な性欲」で説明するという「伝説の流れ」の中にいたとルードルフは指摘している[29]。「説明しにくい獣性」を「それにふさわしくない決まり文句」で説明しようとしたギゼラ・パールは，オルガ・レンゲルとともに，「グレーゼの暴力性を性的な側面から描き出し，そのために，グレーゼが繰り広げた攻撃性にたいして社会的・構造的な諸関係がいかなる影響をあたえたかという問題を掘り下げるチャンスを逸している。」とも指摘している。このルードルフの見解は，そのものとして見れば妥当なものかも知れない。しかし，閉じられた収容所の中にいて，収容所システムの意志決定過程をうかがい知ることができない囚人には，その「獣性」の表出としての暴行が印象づけられ，その制度的背景に思いをいたすことは困難であろう。また，パールが回想録の「まえがき」で「無慈悲な残忍性を誇りとする『永劫のドイツ』が，本書の中でその素顔を見せます。」と書いたように，読者にはナチスの獣性を読み取ることが期待されているという事情も考慮すべきであろう。

なお，「似而非（えせ）医学（Pseudomedizin）」という概念もまた，「獣性」を個人の特性・性格に帰着させる考え方と結びついていることをルードルフは指摘している。この概念は「人体実験を安直にも特定のサディスティックな親衛隊医官による個人的な領域侵犯に還元」してしまい，メンゲレ，シューマン，クラウベルクなどによる人体実験を「『まじめな（seriös）』科学とは一線を画すもの」と見なしてしまうことに繋がる。それは，官民一体となった非人道的な医学研究とそれを可能にしたシステムを免罪することになると批判している[30]。

む　す　び

ラスナーとコーエンによれば，女性に焦点を当てたジェンダー的観点からのホロコース

[28] “Meet Irma Grese, “The Beautiful Beast And One Of The Nazis’ Most Feared Guards,” by All That’s Interesting, Checked By John Kuroski, published May 27, 2021, updated June 25, 2021, in: https://allthatsinteresting.com/irma-grese, accessed on November 18, 2021.

[29] Rudorff (2020), S. 30.

[30] Rudorff (2020), S. 23.「ドクター・ホルスト・シューマンは，400人以上の男性囚人にたいしてX線を照射して大量断種を試み，ドクター・カール・クラウベルクは，卵管に炎症を起こして癒着させる薬剤を女性に注射して，不妊症にした。」（*a. a. O.,* S. 25.）シューマンとクラウベルクの実験室は，当初はビルケナウ収容所にあったが，感染症を恐れて1943年春にはアウシュヴィッツ基幹収容所に移設された（同）。Cf. William R. LaFleu, Gernot Böhme, and Susumu Shimazono, eds., *Dark Medicine: Rationalizing Unethical Medical Research*, Bloomington, Indiana University Press, 2007.（『悪夢の医療史　人体実験・軍事技術・先端生命科学』（中村圭志・秋山淑子訳）勁草書房，2008年，とくにアーサー・カプラン「悪の倫理学―ナチスの医学実験がもたらした課題と教訓」（第5章）。）

ト研究は1983年3月にニューヨーク・スターン・カレッジでエスター・カッツとジョーン・リンゲルハイムが組織した「ホロコーストの生還女性にかんする会議」に始まる[31]。ラスナーとコーエンは次のように指摘している[32]。

> ……リンゲルハイムが一貫して強調したことは，「（ユダヤ人にたいする人種差別の一形態である）反ユダヤ主義と（ホロコーストの前とその最中の）性差別との間にある，無視されてきた複雑な関係を解きほぐすこと」が，ホロコーストの知識にとって決定的に重要だということである。なぜならば，「それ［ジェンダー的観点からの研究］は，［男女の違いを無視した］画一的なユダヤ人観によるのではなくて，ユダヤ人の男性と女性を違った存在として見，そして取り扱う」からであり，「この［男女の］違いを知らないことは，ホロコーストの記憶と再構成で見落とされがちである。」

パールの回想録が刊行されて70年以上を経て，ホロコーストの犠牲となった女性の被害を新しい観点（ジェンダー視点）から検討するための史料としても注目されるようになったことは冒頭で述べた。その回想録が伝える事柄は重くて深い。それを読者はどう読むべきか。ルードルフは次のように言う[33]。

> 「アウシュヴィッツの天使」「アウシュヴィッツ囚人病院のリーダー」にかんする複数のエセーで行われているように，ギゼラ・パールの人物像を低俗なやり方で持ち上げようとする試みは，その回想録の目的にはあまりそぐわない。人の気を引こうとしてそうしているのだろうが，白黒をはっきりさせることによって，出来事の核心を見失ってしまうことは，しばしばある。演劇評論家のアンドレイ・ヴィルトが書いているように，20世紀の大量殺戮の真実は，加害者の悪魔化と被害者の神格化の放棄を求めている[34]。人間にはけっして求めることがあってはならない決断を迫られてもなお，できるだけの責任を果たそうとした人間が，アウシュヴィッツ-ビルケナウには，数多くいた。ギゼラ・パールは「天使」ではない。パールは，人間としての道徳的要請に応えようとした一個の人間であって，その要請が非人間的なシステムの中にあって仲間の囚人だけでなく自分をも試すものであることを知っていた。パールはその考え方，怒り，疑問を私たちに共有させてくれた。その回想録は，歴史研究にたいして収容所の中での生活にかんする重要な洞察をあたえてくれる。それだけでなく，生存者によるこの回想録の中から，人間としてのパー

(31) Lassner & Cohen (2019), p. 4.

(32) *Op. cit.* 引用文中のリンゲルハイムの見解は以下による。Joan Ringelheim, “Thoughts about Women and the Holocaust,” in *Thinking the Unthinkable: Meanings of the Holocaust*, Roger S. Gottleib, Ed. (New York: Paulist Press, 1990), p. 145.

(33) Rudorff (2020), S. 35f.

(34) ここで，ルードルフは次の文献を挙げている。Andrzej Wirth, „ Nachwort zu Tadeusz Browski“, *Die steinerne Welt*, München, 1970.

ルの偉大さを感じとらなければならないし，それとともにパールのごく当たり前の限界性を受容しなければならない。

最後に，回想録にありがちの不正確な噂や記憶違いにもとづく誤りにかんするルードルフの見解を紹介して擱筆する。「噂話」「風評」についてルードルフは，「不確実な事柄を明らかにしたいという欲求だけでなく，事柄を脚色して単調な日常を充実させたいという欲求が生み出した」とするアウシュヴィッツの生存者ヘルマン・ランクバイン[35]の見解を紹介し，「このように演出された描写は，それ自体で，囚人の当時の認識状況を示す歴史的資料［史料］となるものである。」と指摘している[36]。その上で，真偽を確かめ回想録の正確性を高めることが後世の読者の課題であると認識したからこそ，ルードルフはドイツ語版に50ケ所の脚注を付したのであろう。ルードルフは次のように述べている[37]。

ビルケナウにおける殺人事件にかんする何十年にも亘る研究と数多くの認識が確証されてきた。今日，必要なことは，これまでに到達した知識と突き合わせ，明らかに不正確な事柄を訂正し整理することである。もっと正確に言えば，［回想録の］（男性と女性の両方の）執筆者の間違いは，意図して歪曲しようしたからではなくて，研究によって検証する可能性がまったくなかったために，チャンスがあれば，おそらく自分で訂正したと考えられるようなたぐいのものなのである。

[35] Vgl. Hermann Langbein, *Menschen in Auschwitz*, München, 1995, S. 16.
[36] Rudorff (2020), S. 25.
[37] Rudorff (2020), S. 25f.